



三子化

月雪之表  
諸國叢句

徐真



乙午化

後分序

渡白狂

蓮二...と双林の供養と...  
才了と祖存の法と...  
の恩よむ...  
ありんか...  
ある國...  
月...  
世...  
不...



あけふの午に西へ豊なむら集りて  
あり尾張信濃のちうをいあさむは國  
大和る也但馬なりとか笑越中のもれ  
くらくくもさるやうして國北の又之所  
あんなまにちりいけをさるは連二の一生  
の殆どあして百圓の餘命とやうつと  
るもあさると二きり足提河のは道  
といひもく運船の後方よあせつて  
廿一冊とさるるさかたをさるるさるる

も國に所入位階とさあつてもたれ  
とあさつと一方の象とさ中のは徒心  
中歳一遇の縁とさるるさるるも  
に身とあつた信とさるるさるる  
しあさる

享保二の  
八月廿九

正月 尾州名古屋

葉行

比誰

松梅の一二の香やらの月

あーの漸くしんせ水音 葉環

秋凡の序とある若号ある下流幸

ふあけて通る望の足代一橙

飯持の鳴と移しられり竹夜

机あくるやうな州の花 古園

乳雪 同名古屋

武内

下牧

柳の柳のぬれやとおの雪

はくせいの炭とたのむ 薑和 凡江

献之とありぬ串海嵐と高敷 牙的

ふくはくをたれよ言傳 湛行

盆とあるは屏あはれ月の夜 操之

雲りし秋小月とるわり也 雲仙

三張か

三



と云 同 熱田

僧

いふは此の所の月や竹の香 比皆  
神のたつたきよ梅のあはれ 登他  
ニ服よふ葉トさふ歌とて 比由  
海と七里の遠く十町里 美由  
お祓の町とさるる世ふふ 周川  
お食の枝とさるる世ふふ 聖秀

と云 同 後册

駒とさるるじやらのら此鼓哉 羽市  
こころのうけおきよんのみ 枝 梅豆  
うきの中におきよんのみ 比由  
舟のたつたきよ梅のあはれ 市  
あしと梅よ月おの水の香 比皆  
葉とさるる葉の園の 聖秀

乙酉月 信州阿弥

乙酉月とて鳥の月の中ちよれ 梅風子

おまおのふとふと揃て可美

板面とて鳥の月の中ちよれ 白葉

はらふらめあつておま揃 梅色

大なるよりのりの時方から 角子

め七のふりぬしちね折 是知

乙酉月 濃州駒ヶ江

乙酉月とて鳥の月の中ちよれ 可美

錦のまきれもあつておま揃 豆馨

鴨のふもとをいさよ遊ばて 梅信

はら婦まの中へ立候 起外

ねの月見るとおま揃て可美 路白

秋の季のまお月の中ちよれ 起風

乙卯月 野州四月市

幸崎の松の脈と月おくれ 九葉

机の花と旅のそとり木 魚考

まふれや酒まを酒と酒まふ 摘也

降らぬ山てしるのそはら 里南

け里北回ちまもきのふおまふ 空南

るらまのそとりまふらまふ 金市

乙卯月 百廿六田

向てやま心の月と桐一葉 三

ちろくくれふかーくろせ 露竹

秋まそに投のゆまもまふら 一葉

向てやまのそとりまふら 三

あのみをまふらまふら 竹

竹のそとりまふら 葉



豊後竹田

さく波のさくらやうきの花嵐

梅丸

名も河さくら 鴨の足音

蝶翅

式日の供とくらひに振ちて

宜中

土圭障子に月のあかり

蛇水

隣の小ちきしよたひ葉枝標

睡免

新酒の北北氣もあふふ

琳林

虹月 羽州久保田

文谷

神あそび塵ふかき月

春あそびおひききも音も

一橋

入おのけりくく塵も角鹿く

口述

山又山とちくちく水

流斗

夕あそびに脈と曲きく杜瓦

竹游

ふみくさこれ居て涼き

黄柳

尾州難波

兼谷之以

一節北川と流ありおのち中

登りしん流くも多うし流し 銀行

朝もおる瓦をむしり行りく 街舟

ふ所法めくしん流くおれ 千季

蕭々とに言ふ所と結く月の秋 尾子

花壇へくしん流くおら蓋の鳴 久橋

諸国お句 一人一唱

尾州名古屋

月より色耳もあはれ時を 九次

麦飯のちかやまげも梅の花 景家

芋の穂いそむらおめく 七哉 九餅

おあらしめおのちのたし流れたり 山朴

詞もたすくとときりいふのゆり 是輔

り秋や尾毛の袖とゆかりをり 暁吾

異角取次

又多由の海の浮世ありを拈册 麦士  
 口常くみ事へ花の香吹くを 貞旭  
 猶書し初をさしりしおきくれ 不遠  
 一ありとねしはふむおきくれ 魯石  
 城郭と故よかやもやいおき<sup>作</sup> 秀光  
 早くすや月波のまね釣瓶 可柳  
 川さみのぬくるの尻らうふ 水鶴  
 舟まの行り高ききし 鶴の花 只与

梅の花のまねおきくはるあくれ 梅岡  
 るおのゆもかききし 九月を 季計  
 るのまをくはるるのわり哉 逸末  
 層はとらうれくありくもあき 如亮  
 言を臨よききくはるる水鶴 在亭  
 八月や竹まの山の月北 園 季紀  
 一まをみゆかききくはるるおき 花中  
 蓮の花もやまをくはるるの可らふ 羽化





唐化籍しし拙ふを嘆きし 擗之  
 庭前も嘆きし 一志の思ふに哉 霞山  
 旭の鳥も嘆きのとて 千里  
 中ねれし如し 世に何れに 葉  
 笠ねけし笠さるもあつ 涼舟 丁牧  
 水鏡かとも 秋をり 世に誰れ 流幸  
 よまらしに お様のおを 一橙  
 折きし 風氣し 暮る 竹根

鴨しりしと 粟よ 本ありや 秋の 素球  
 秋風や 吹りし 雨の 長園  
 若し 秋の 塔も あらば 中を 比誰  
 昔の 此系に 月を せや 昇角  
 漢御の 歌の ちを 枕 巴羅  
 卯の ちや 法印の ちを 河文  
 姫の ちの ちを 命 二は 拿行  
 白の ちの ちを 水 杉文

川 礼のこゝ今んそく 亭まのをも 詩中  
珠の糸よ 四角のたけりや 多の  
石塔と馬よ けりなをそ 哉 花把  
るの葉に けりなをそ 階よ  
福もん 何や 房のいり 小藤の 角 巴静  
水折の 以葉のまを 一 下 葉水  
角ゆへと 蹄のけり 花 茨 一 并  
色もるや 鏡のけり けり 序 芳

月おろし 月とあく 梅や雪の 楓 葉  
批切のあし せん せん せん 哉 之 飛  
雪の風 吹く せん せん せん 月 比 比  
雪の此 小 雪の せん せん せん 花 花 由  
雪の 雪の せん せん せん 周 川  
雪の 雪の せん せん せん 登 仙  
雪の 雪の せん せん せん 如 香  
雪の 雪の せん せん せん 美 由

三十一

三十一

切あぐくし 赤さうり 川 氷谷花 右洞

踏馬も 浅免と 独り 柳うれ 同清州 琴江

出がらや 二月の 向れ 月 梅並

秋まかた ちかき ちかき 月 吳雪

月のおれ ちかき ちかき 梅 信州阿比 五

あさ ちかき ちかき ちかき 梅 梅

梅うきや 独り ちかき ちかき 梅

梅のちかき ちかき ちかき ちかき 梅

あさ ちかき ちかき ちかき 白葉

ちかき ちかき ちかき ちかき 星志

折るや ちかき ちかき ちかき 角子

ちかき ちかき ちかき ちかき 可美

ちかき ちかき ちかき ちかき 齋行

あさ ちかき ちかき ちかき 同伊之 風

旅より ちかき ちかき ちかき 梅

ちかき ちかき ちかき ちかき 洞雲指



出代やふりきくさるのり 長飯田 其得

向ふく支里よりきく 長流

えん流やうかくて我旅の銘の所 和川

傾城のふくたおと秋のきき 龜岩

あそよのなからふちの 登南

世といふきあしはふあつて秋の 山石

そくそくそくや子共のちとふ の翁

神この母こはとれ 津水

信道の院の家 同仁 蓮松

ねの月 水 龍松

み枯 龍松

切 龍松

様子 台之

元山の孫 油林

旅 當南

林 松千



春風と招きかきよる常我 花丸

木下と下園とを毛解の所 毛解

白月もかいたくしてや蓬餅 白桃

これの瘦下候 松竹と花 毛流

又よき春と花とをわたり 孟志

名月のあやをくらげ 雲の如 雲

鏡花や不くのみ 木之 山行

白くとも言決とあはく 懐く 雲

花やちりて新よ瘦る大根の 可及

初午に今もいあしくゆえんを 猶也

あつぬおの井きくよ喜ぬと水鏡 花江

坂の山なると物 云ふに 花葉

よらんせぬ娘と謎や春の毛 桐水

可きもやのうらひを写すの花 泉次

川よりも水鏡静也 脈月 柳五

静くも水鏡の面をた 柳我 拿布

お起しよんはるのさう水師花 魚房

す肩のう角とかくもやせも 空海

常るゆや一豆のこまや中丸むらり 和 舟は舟 丸角

珠のふ糸れそとらうあつや後葉 冠那

了る付の吸也かきふ一まぶくれ 加辨金次 夜谷

茸持や常うあてまきくのあひま 由之

岩のくりに行とれ水。月お裁 楓五

川柳あつるあつる心丸とれ 夏



